The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	映像スケッチからの振り返り
Author(s)	永山, 亜樹
Citation	臨床哲学. 2016, 17, p. 158-166
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57581
rights	
Note	

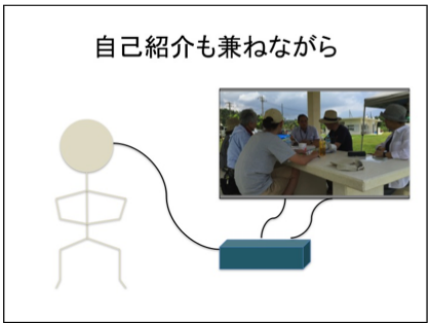
The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

映像スケッチからの振り返り

永山　亜樹



はじめまして。永山 亜樹です。少し自己紹介を兼ねながら、沖縄の報告をしたいと思います。

実はこの報告書を書くのに１ヶ月近くかかりました。１度はできたつもりだったのですが、どうもかしこまっている文章に見えるよ、いい文章を書こうとしないでと「先生」(「永浜先生」を「先生」と呼びます）からアドバイスをいただきました。

私はどうも文章を書くときにすぐに言葉が出てこないのです。これは会話でもよく似たことが起こります。何が起こっているかというと、私の頭の中では、映像が真っ先に現れるのです。今回で言えば、沖縄の研修先のことを文章で書こうとすれば、沖縄に行く前の準備の映像から､空港での飛行機の観察やその周りの人､そして到着してから日にちを追って、次々に流れいきます。

そこには言葉は浮かびません。むしろ、その映像の中にいる自分がものを触っている感触や周囲の雑音などが伝わってきます。なので、報告書を書く作業をするときは、
このめまぐるしく過ぎる映像に言葉を付け足さないといけないのです。

この感覚を、どのようなたとえを用いれば伝わるのか考えていました。こんな感じに近いのかもしれません。みなさんが映画館に行った時を想像してください。みなさんは目の前に映る映像や音楽、話している人を見ていると思います。それを見ているときに、考えていることやを感じていること文章にしてくださいと紙を渡されてしまいます。その時みなさんは「え､なんで今なの」「今見てるのに！」と思いませんか。私は､いちいち止めて、言葉を探す作業をしなければなりません。

映画館が終わってから、感想を書いてくださいという感覚ではないのです。思い出すときは、圧倒的に映画館の画面のように視界が占領されるのです。本当なら、この頭のなか

にある映像を、線で繋いでプロジェクターに映したらどれだけ臨場感を持って伝えることができただろうと思うのですが、そんなことはできません。

そして、今回自分自身の中で新たな報告書の書き方を試みました。それは、いきなり頭の中にある映像を言葉にするのではなく、映像をそのまま絵に描き表してから言葉にすることです。このアイデアをくれたのも先生でした。今までこんなこと言われたことがなかった！　そんなプロセスを踏んでもいいの？！（とにかくなんでもいいから書きなさい！とは言われてきましたが）と思ったのです。それでなんと、描きあげた絵（スケッチ）は１００枚にものぼりました。そのようなプロセスを経て、今日に至りました。

今回の報告は、紙芝居のような発表になってしまいますが、どうかご視聴ください。

私は、沖縄の研修に来たにも関わらず、はじめに訪れた事業所については、気持ちがどこか遠くにいました。上の空という感じです。その理由を正直に書きたいと思います。それは、興味の対象が沖縄の施設ではなく、浜渦先生にあったからです。それはなぜかわかりません。

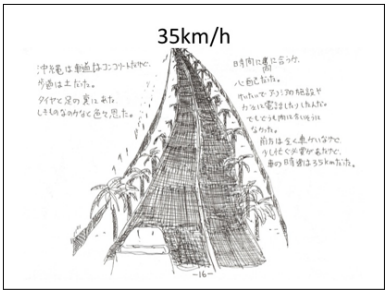
沖縄に着いて浜渦先生ご夫妻とお会いしましたが、私は顔を見るのが苦手で、あまり顔を見ません。視線をずらすと、浜渦先生の足が気になったのです。綺麗に整っていない、指の並びがなんだか面白かったのです。それが強烈にインパクトに残っていたので、足とご挨拶した感じになりました。

沖縄にいるあいだ、毎日チェックしていることがありました。それは、浜渦先生が、きちんと３点セットがそろっているか確認することでした。

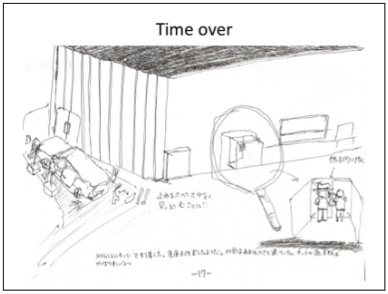
今回の旅は、６人での研修でしたが、私の中ではこの６人と浜渦先生のサンダル・サングラス・ウエストポーチの９つそろっていることがピタッとした感じになるのでした。サングラスについては、メガネの上にかける式のものだったので、今日はついているか、ついていないかも確認していました。

運転してくれたのも浜渦先生だったのですが、アソシアという施設（主に就労移行支援を行なっている）には急がないと間に合わないかもしれないという状況下、ふとメーターをみると３５を指していました。

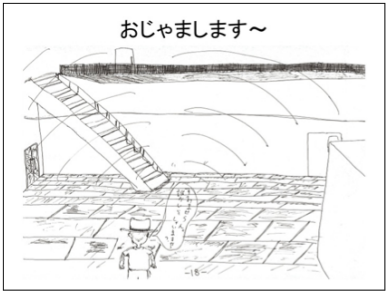
この車は時速３５kmの徐行運転だったのです。それが私にはまた面白かったのです。



そして、アソシアに着くと、やはり営業時間は終了していました。それでも、とりあえず、入ってみましょうと浜渦先生の一言で、車を突っ込みました。私は興味のある事業所だったので、浜渦先生にテクテクついて行きました。

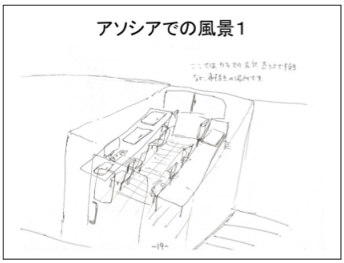


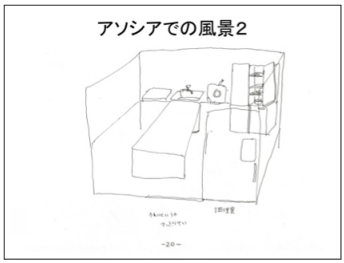
営業時間が終わっているのですが、テクテク入って「すみませ〜ん、誰かいらっしゃいませんか？」と。ドイツではこういう時は入れてもらえるみたいです。



そして、案内してもらえることになりました。事務系の仕事場です。アソシアはカフェの営業を主体に、就労の準備をしています。カフェでの売り上げや会計をする仕事です。もちろん、営業時間外なので、人はいませんでした。

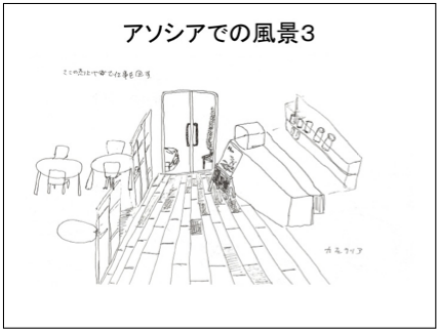
これはカフェに出す料理を作る調理場です。ものすごく殺風景でした。冷蔵庫の奥には、翌日出すスイーツが入っていました。新作なども考えているみたいです。

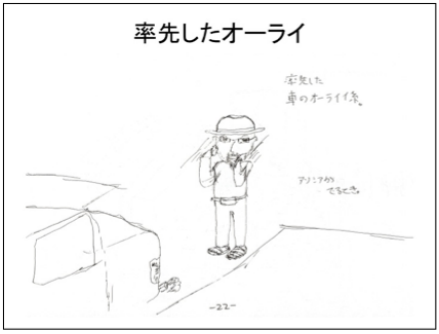




カフェテリア。座席はまだ横へ４列ほどありますが、私が気に入ったのはレトロな柔らかそうな木目の床でした。

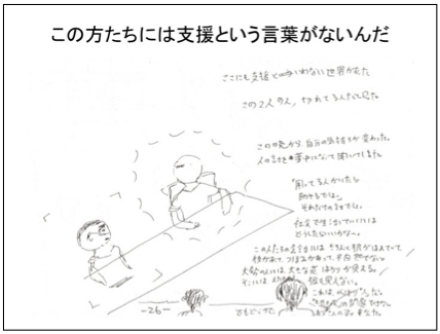
そして、まだ私の興味の対象である浜渦先生の率先したオーライ係でいつもつぎの場所へ向かいます。





これは３日目に訪れた、「ハーネス」という事業所の中の様子です。

ここで私は、「ハーネス」で出会った永山さん、島村（盛秀）さんの話を聞いて、頭がピリッとしました。このあたりから、自然と浜渦先生から沖縄の施設へとシフトしていったような気がします。

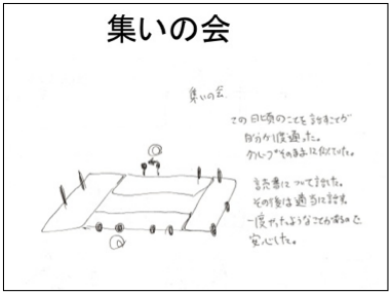


今回、５つの施設に伺わせてもらいましたが、「一味違うな」と偉そうですが思ったことは、運営者の方が、利用者の方を「支援する」という言葉を使わなかったことです。そのことが、一番自分自身の中で大きく物事を考える上で、新たな視点をもたせてくれました。

ハーネスの永山さんは「ただ、目の前に困っている人がいたら、どうした？って思うでしょう。その人がたまたまホームレスの人だった。運転ができると言ったから、送迎をしてもらっているんだ。つまりそういうこと。」

ここの施設には、精神障がいのある人が多いのですが、このような話を聞けば、この施設は、一緒に地域で活動し、社会貢献する場所になっているのだと分かりました。
そこでは、人の位置づけや順位は感じませんでした。

永山さんの視線を借りて見た景色は、利用者の方と「みんなで一緒に社会の中で暮らせればいいね」という、支援する・支援されるという思考は存在せず、なんとかしよう！と、「支援する」という言葉にする前に湧き出る感情で動き出す世界でした。



こういう視点から出発した会社はどれほどあるのだろうかと考えてしまいました。

ここの施設で、その日の夕方から集いの会がありました。集いの会は、毎日のことを何でもいいので話す場所です。

私は、自分より若い年齢の男の人と席が近くになりました。彼はあまりしゃべりません。順番が回ってきてもしゃべらないことがありました。しかし、今回は修学旅行の話をしてくれました。私はどこに行ったのかすごく気になったので質問しました。すると、USJ と言ってくれました。小声でしたが、そのあとにも気に入ったアトラクションの話も続けてしてくれました。彼は、話したい気持ちはあるけれど、言葉が出てくるのに少し時間がかかったり、人が途中から話し始めると、口を閉じてしまうようでした。

途中でスタッフの方が、彼が自閉症であることを説明してくれました。今までは一言も話しませんでした。でも、ここに来てから本当に少しずつですが、話しはじめました。ささいなことかもしれませんが、本当に嬉しい気持ちです、と言いました。

そんないい空気が流れていた中で、すごく悲しい場面もありました。何かの話で盛り上がっていた時、彼が何か発しようとし、みんなが彼を見ました。すると、別の人が「○○（彼）君も同じ気持ちなんだね。」「あ〜、△△だと思っているんだね。」と言い始めました。

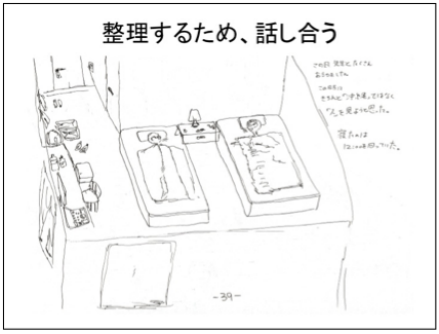
私の心は、火山が噴火したような怒りに駆られました。歯を食いしばっていたけれど、「ま

だ喋っていないじゃん」と呟きました。隣にいた先生は、じっと彼を見て、彼の話すタイミングをずっと待っていましたが、話しませんでした。どうして、彼の気持ちが分かったように話すのですか。長く過ごしているから、気持ちがわかるのですか。何か話そうとして口を開けているのに、どうして、待たないのですか。話そうとしているのに、どうして彼ではない人が、私が代わりにとばかりに話すのですか。

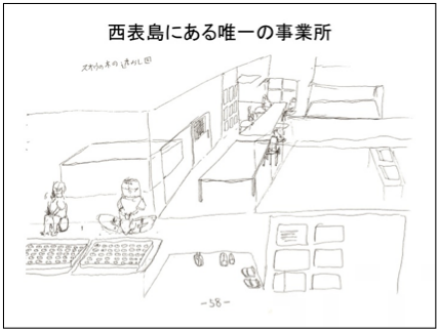
私が今このように言えるのも、自分自身が言葉が咄嗟に出てこない時があるからです。しかし、時間があれば、人が待ってくれる雰囲気があれば、理解してくれる人の前で話せる自分に気づいたのです。

これまで、言葉が求められている時に出てこないことで自分に落胆することが多くありました。「また言えなかった」。急かされて出た言葉は、思っている気持ちに寄り添っていないこともまた事実なのです。待ってもらえる環境ができた時、話せる自分がいたのに、どうして「もう少し待ってください」と言えなかったのだろうと自分が悔しくなりました。

私はその晩、先生と熱く、「障がい」について「支援」について話し合いました。



これは、私にとって、心の中を整理するための手段の一つです。なかなか言葉にできなくて、これまでは、内に溜め込むと物にあたったり、不機嫌になる、一切喋らないということが多くありました。はじめは、それらのことをうまく話せず、先生に手紙で伝えたりしていました。でも今は、よほどしんどい時がない限り、こうやって、話して整理しています。



翌日、西表島に移動し、西表島にある唯一の事業所「スオウの木」を訪問しました。

私は、この「スオウの木」で一人の男の人と仲良くなりました。私より１つ年上の人です。その男の人は、知的に障がいがあるようでした（詳しいことは知りません）。

彼は、朝礼の挨拶をリードする係でした。

突然、彼は私の手を握りました。

私はびっくりしてビクっとなりました。

横にいた指導員の人は「いけないんだよ。手を握っちゃだめだよ」と言いました。私は「？？？？」となんで？と思いました。
突然で驚いただけで、嫌じゃありませんでした。私は嫌ではなかったから嫌な顔はできませんでした。

どうして「手を握っていいか聞いてから握らないとダメだよ～。」と言わなかったのでしょうか。少し寂しくなりました。

その男の人は午前中に作業をするのですが、やる気がなく、ぜんぜんしてくれませんでした。私も試行錯誤しましたが、うまくいきませんでした。往往にして人をやる気にさせるのは難しいなと思った時間でした……。

その男の人は、午後からデイサービスで石垣島に行くことになっていました。彼は、私についてきてほしい様子でした。私は進んでお見送りに行くことにしました。すると、スタッフの方が「ごめんね」と言いました。

私は、また心が沈みそうになりました。
「どうして謝られるのだろう」
「ありがとう～。よろしくね。」とは
言ってもらえなかったのです。なぜですか。
彼が、障がいがあるからですか。私はわかりませんでした。

私も、大学で教室に入れないときがありました。一緒に教室に付き添ってくれる人がいましたが、その人に対して事務の人は、「ごめんな」とはいいませんでした。「頼むな～」と言って

くれていました。

私は、自分に付き添ってくれる人に対して「ごめんね」という言葉を聞いていたら、心が沈んで、教室に足を運ばなくなっているような気がします。友だち感覚ではなく、助けてあげないといけない人なんだと一瞬でも考えしまいます。そして、自分は迷惑なのかなと、ふとした瞬間でも思ってしまいます。

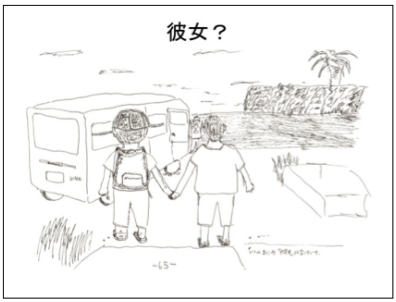
お見送りの時は、その男の人が、手をつないでくれました。まるで彼女になったようでした。

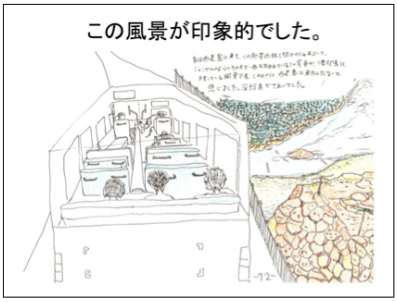
でも、ショックな事件が起こったのです。
遠くからその男の人に声をかける女性がいます。すると、その男の人は私に向かって「彼女！」と嬉しそうに言っていました。そして、遠くにいる女性に向かって「彼女〜！」と私のことをいうのでした。二股なのです……。

無事に、船までお見送りをしましたが、
その男の人は、私の手を引いて、船に乗ろうとしました。でも、そんなことはできません、お金も持っていない、無賃乗車になります（そういう問題ではありませんが……）。

私は、ほんの数時間だったのに、すごく楽しい、素敵な時間を過ごしました。「また会おうね、いってらっしゃい！」と送りました。彼は、船の入り口をふさいで、大きな体をジャンプして手を振ってくれました。

出入り口を占領してしまったため、乗り降りしたいお客さんが通りにくそうだったのはいうまでもありません（笑）。





そして、私たちは西表島の北にある旅館へバスに揺られながら向かいました。その車中から見える、明るい土の色、マングローブをみて、あ〜沖縄にいたんだなと思いました。

私は、これまで沖縄に３度ほど行ったことがありますが、どれも観光目的であり、海がきれいだ・食べ物がおいしい、そして城（グスク）や米軍基地を見ては、ほんの少しの文化や歴史に触れると言った、表面を齧るような旅をしてきました。

しかし、今回４度目にして、現地の精神障がい者の人が働いている会社もしくは通所している事業所を見学できる機会をいただき、これまでの知ったかぶりをして帰る旅ではなく、少し踏み込んで・掘り下げて帰って来ることができました。

それらを、自分自身の視点から感じた事、考えたこと、学んだことをプレゼンテーションしてみましたが、みなさんに伝わりましたでしょうか。

紙芝居のような発表でしたが、最後までご視聴いただきありがとうございました。

追記：私のプロフィールについては、ホームページを参照いただければ、幸いです。
「AJU｜発達障がいな Aju の絵」
http://ajugallery.sunnyday.jp